

景徐周麟関連史料と作品集の所蔵状況及びテキストに関する調査

武 頌 中国語・中国文学分野・専門 博士後期課程2年

はじめに 景徐周麟は五山文学後期を代表する詩僧であり、作品集に『翰林葫蘆集』がある。『翰林葫蘆集』は、上村観光編『五山文学全集』(第四冊)で活字本があるが、校勘記などは附されておらず、一部作品の文字には解釈上疑義がある。そのため、各所に所蔵される『翰林葫蘆集』の写本、また、内閣文庫所蔵『惟高詩集』における景徐周麟文明期詩会関連作品について現物調査を行い、活字本との文字の異同を検討した。他、続群書類従所収『宜竹残稿』も景徐周麟の七言絶句のみを集めた書であり、文字の異同について調査を行った。以下、各本についての調査結果をまとめる。

岩瀬文庫所蔵『翰林葫蘆集』(天明元(1781)写一冊) 書籍は黄色い表紙の薄い一冊、封面には『翰林葫蘆集 全』と書いてある。「観世小次郎画像讃」という一篇のみ収録されている。該当篇は上村観光編『五山文学全集』第四冊『翰林葫蘆集』第十一巻、眞賛五五七一五五八頁に所収。全文と後記など合わせて十一頁(紙六枚)ある。訓点付きで、字の違いが多く、そのために理解が違ってしまふようなところがある。何カ所もある。

宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵『翰林葫蘆集』(徳山毛利本十六冊、書写年代不明) 茶色表紙の十六冊、各冊の封面にジャンルが書かれている。印文は「(左から右) 明治二十九年改濟 徳山(上) 毛利家蔵書(下) 第 番 共 冊」であり、本文から見て、詩以外句読点あり、地名、人名などに傍線が引かれている。訓点なし。校異について、活字本と比べて、詩題の「東坡羹」を「東坡」と書き落とした例がある。詩の内容を活字本と対照してみると、不適切な箇所が多いが、全集より若干適切どころがある。ほか、十一冊目と十二冊目は「入寺、法語」で、十六冊は「秉弘、釣語など」で、活字本に未収録である。

国立国会図書館所蔵『翰林葫蘆集』(写本十五冊、書写年代不明) 二帙十五冊である。黄色い封面で、印記に「帝国図書館蔵」とあり、「明治八年文部省交付」、「足利学校公用」の記載がある。書名は各冊冒頭部分は『翰林葫蘆集』で、後記の部分は『翰林葫蘆集』となっている。本文には、朱点が施され、一部人名、地名に傍線が引かれる。また、一部の専門用語の傍に注釈があり、例えば、「師子國」について、「今ノセイロ島」、「鳥菟国」には「今ノヨーチャナ地方」などである。字の違いは、活字本と対比してみると、やや多く、活字本の「大虚」、「大守」などが「太虚」、「太守」であるなどからして、割と意味的に適切に見える箇所が多い。ジャンルと内容について、四冊目と十二冊目、十四冊目は「入寺、法語」、「秉弘、釣語」で、活字本に未収録である。

内閣文庫所蔵『翰林葫蘆集』(寛文(1661-1673)写十三巻十三冊、江戸初期写六巻六冊) 寛文写本は青い封面の十六冊、ジャンルはほとんど記されず、ジャンルごとの収録は乱れているように見られる。江戸初期写本は黄色い封面の六冊で、ジャンルは各封面に記されている。主に詩部について調査を行ったが、二写本とも、句読点や地名、人名に傍線があり、活字本と字の違いはあまり多くない。なお、入寺、法語、秉弘、釣語など活字本に未収録の作品も比較的完全に収録されている。

蓬左文庫所蔵『翰林葫蘆集』(室町写本、駿河御譲本二冊) 黄色い封面で、内容は、一冊目は入寺、法語(活字本未収録、徳山毛利本十二冊、寛文写八冊目、江戸本一冊目に相当)で、二冊目は出衆、入衆で、出衆、入衆はほかの写本より比較的完全に収録しているようで、文学性が見られ、検討する価値がある。



図1 内閣文庫所蔵寛文写十三卷十三冊公開画像二枚と内閣文庫所蔵江戸初期写六卷六冊公開画像二枚
(国立公文書館デジタルアーカイブ)

内閣文庫所蔵『惟高詩集』所収景徐周麟詩 永禄元年(1558)の作品で、筆録の雑録詩集で、茶色の封面に「惟高詩集 惟高和尚真跡」と記され、禅林の詩会作品などが収録されている。景徐周麟の漢詩十二首が収録されていて、大体文明十一年(1471)から永正八年(1511)の間の作品である。そのうち、「楊家夜遊園」と「五柳巾」は活字本に未収録である。活字本に比べ、何カ所か字の違いによる解釈の違いも生じそうであり、詩会におけるほかの参加者の作品と比較でき、景徐周麟の当時の文壇における地位と文筆の特徴がわかる重要な資料である。

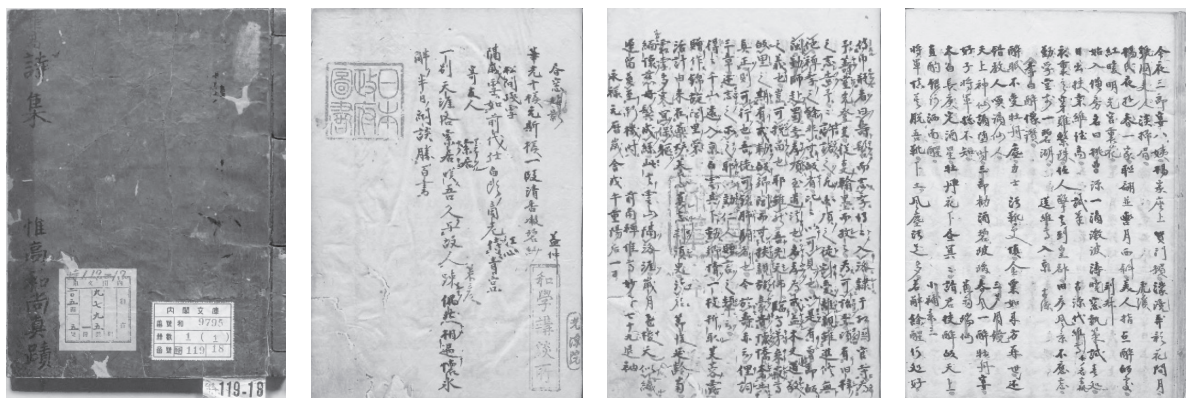


図2 内閣文庫所蔵『惟高詩集』公開画像(国立公文書館デジタルアーカイブ)

続群書類従所収『宜竹残稿』 続群書類従巻第三百卅七に収録されている。『宜竹残稿』は『翰林胡蘆集』における七言絶句のみを抄録した集である。続群書類従による解説には、「山水草木花鳥を詠んだもの。交友との贈答の詩が殆んどで、禅的風格に乏しい」との記載がある。『翰林胡蘆集』の活字本と対照してみると、詩題の「書隠」を「画隠」と記した誤りもあるが、活字本所収「扇賛三首」における「高柳風涼拂回來」の「拂回」を、「拂面」と記し、より適切な箇所がある。また、「春江白鷗」詩の転句と結句「人門世事春江外、不有此清与此閑」は『宜竹残稿』では「除春江外人間世、不有此清兼此閑」とはっきりとした区別があり、意味的には検討、参考ができるような箇所が見られる。

おわりに これまでの閲覧、調査により、活字本と各写本の比較、校勘ができ、作品の精読と検討に大きな参考となる。今後、今回の調査では閲覧がかなわなかった東京大学図書館所蔵本などの関連写本と史料に関して調査を行う予定である。